

## 震災から学ぶ

松山東雲中・高等学校校長 小泉 勇治郎

1995年1月17日早朝午前5時46分阪神淡路地区に大震災が発生し、一瞬にして6430数名の命が奪われ、46万世帯強の家が全壊・半壊となった。私も神戸市灘区の自宅で震災を経験したひとりである。地震があるのは東京で、神戸などには絶対起こらないと信じていたのは私ひとりではなかったはずである。夜も明け切らぬ時に起こった震災は、夜明けとともにその被害の大きさを現した。倒れるはずのない高速道路の高架橋を倒し、高層建築をいとも簡単に崩壊させ、人々の住む家屋が倒壊し、火災が発生した。

当時勤務していた神戸YMCAに出かけ、その日から救援ボランティア活動を始めたのはごく自然な行動であった。次の日には東京からペットボトル6000本が到着し、その次の日には同じく東京から毛布6000枚が到着し、避難所に配布した。神戸YMCAでの救援活動は、救援物資の受け付け、仕分け、各家庭・避難所への配布、全国からのボランティアの受付・派遣作業、各種情報の収集と提供活動であった。

日頃から野外活動、体育活動などで大学生を中心としたボランティア活動を行ってきたYMCAにとっては震災救援ボランティア活動はごくごく自然な行動であった。

初期の救援活動を終わって、次の段階の活動をYMCAは始めていた。それは、物資の救援ではなく精神的な救援活動である。いわゆるPTSD（心的外傷後ストレス症候群）に対するケアである。保育園・幼稚園を持つYMCAは子ども達を集めて遊びを中心とするプログラム提供をしたり、ひとり暮らしの高齢者住宅を訪ねて話し相手になったりと、人と人のふれあいを大切にすプログラム提供を行った。

震災は多くの命を奪い、住む家を奪ったむごいものであったが、反対に震災によって人と人の絆がより強くなり、人を助けたり、協力することの大切さが再確認されたことも確かである。人間はひとりでは生きられない、お互いが一人の人間として認め合いながら生きていくことの大切さが再確認されたのもこの震災が大きな契機となっている。

### 小泉 勇治郎氏 プロフィール

2003年現職に就任

2005年1月17日に松山東雲中

・高等学校グラウンドにて

「1. 17四国からKOBEへ祈り

を」を実施した。震災の経験から得た教訓を発信している。

著書に「私と韓国・朝鮮—

YMCAと共に30年」

(明石書店)がある。